

感動新聞

平成22年3月号 発行者 細川栄一

皆様、お元気ですか？ 笑顔、元気が一番です。これからもよろしくお願い申し上げます。

ビジネス経営の最前線で頑張っておられる方の役に立つ情報となればと思います。喜んで頂ければ幸いです。

西郷隆盛の人生訓

「敬天愛人」

西郷隆盛の明治維新での国家にたいする貢献は、偉大なものがある。

西郷の後半生での生き方が、西郷の人生観が表れている。

まず、西郷ほど無欲で生きた人はいなかった。

帝国陸軍元帥と近衛都督を兼任し、閣僚のなかの最有力者でありながら、外見は普通の兵士と同じだった。月収が数百円あっても、生活は15円で優にまかない、残りは困窮している友人に気前よく与えていた。

東京の番町にあった住宅は、見るからにみすぼらしい造りで、1カ月の家賃は3円だった。

普段着は、薩摩緋の短衣に幅広の兵児帯で、大きな下駄をはいていた。

この身なりのままで、宮中晩餐館でもどこへでも出かけた。西郷は自分のことだけでなく、財産にも無関心だった。西郷の多額の年金は、ほとんどが鹿児島島に創設した私学校の維持費に充てられた。彼の読んだ漢詩に、次のようなものがある。

わが家の遺法、人知るや否や 児孫のために、美田を買わず

この詩のように、西郷は妻子に何も残さなかったが、明治政府の謀反人として死んだにもかかわらず、国家が遺族の面倒をみた。

西郷の唯一の趣味は犬だった。

届け物は、贈り物と見なして一切受け取らなかったが、犬に関するものは、厚く感謝して受け取った。特に犬の首輪の好みにはうるさかったようである。

西郷は生涯、犬を友とした。

犬を伴って、昼も夜も山中で過ごすことが多かった。

誰にもまして孤独の人であった西郷は、犬をもの言わぬ友として孤独を分かち合っていたのだ。

「敬天愛人」の言葉が西郷の人生訓をすべて要約している。

すべての無知は、自分だけを愛する利己心にある。

「天」は全能であり、不変であり、きわめて慈悲深い存在であり、その法は疑うことなく、誰もが従うべき、きわめて恵み豊かなものとしていた。

「天は人も我も同一に愛したまうゆえ、我を愛する心を以って人を愛するなり」

「天」を信じ、その法を信じ、またその時を信じた西郷は、自分のことも信じていた。

「天」を信じることは、常に自分を信じることでもあったからだ。

「断じて行えば鬼神もこれを避ける」と西郷は言った。

「天を敬う人」は、正義を尊重し、実行する人にならざるをえない。

「正道を踏み、国を以て斃るるの精神なくば、外国交際は全かるべからず。彼の強大に畏縮し、円滑を主として、曲げて彼の意に従順する時は、軽侮を招き、好親かえって敗れ、ついに彼の制を受くるに至らん」

このような発言をした西郷を、外国の使節はそろって尊敬した。

誰よりも西郷を尊敬したのは、イギリスの国益を守り通したイギリス公使、パークス卿であった。

「正しくあれ、恐れるな」というのが、西郷の国政のやり方だった。(参考著書：代表的日本人)

稲盛和夫氏は同郷としての西郷さんを尊敬しており、稲盛氏も敬天愛人が座右の銘です。

ものごとの判断基準をどこに置くのか？

その結果、稲盛氏は火中の栗JALの再建を引き受けることとなったのでしょ。